人総研シンポジウム抄録

福島原発事故 10 年の経験から学ぶ
―当時小学生だった若者達との対話から―

平田　修三[a,b]、金　智慧[b,c]、鴨下　全生[b,d]、藤井　豪[d]、菊池　翔大[d]、阿部　ゆりか[b]、
櫻田　昂樹[d]、原田　光汰[d]、加藤　裕美[e]、高村　柚奈[d]、鵜沼　はな[f]、越沼　愛美[d]、
田中　翔大[d]、富塚　悠吏[g]、遠藤　凌佑[d]、小島　隆矢[b,c]、増田　和高[b,h]、
桂川　泰典[b,c]、熊野　宏昭[b,c]、日高　友郎[b,i]、扇原　淳[b,c]、辻内　琢也[b,c]

Lessons from 10 years of experiences after the Fukushima nuclear accident
− From the dialogue between young victims and researchers −

Shuzo Hirata, Jihye Kim, Matsuki Kamoshita, Go Fujii, Syota Kikuchi, Yurika Abe,
Koki Sakurada, Kota Harada, Yumi Kato, Yuzuna Takamura, Hana Unuma, Ami Koshinuma,
Shodai Tanaka, Yuri Tomitsuka, Ryosuke Endo, Takaya Kojima, Kazutaka Masuda, Taisuke
Katsuragawa, Hiroaki Kumano, Tomoo Hidaka, Atsushi Ogihara,
Takuya Tsujiuchi

a. 仙台青葉学院短期大学こども学科（*Department of Child Studies, Sendai Seiyo Gakuin College*）
b. 早稲田大学災害復興医療人類学研究所（*Waseda Institute of Medical Anthropology on Disaster Reconstruction*）
c. 早稲田大学人間科学学術院（*Faculty of Human Sciences, Waseda University*）
d. 早稲田大学人間科学部（*School of Human Sciences, Waseda University*）
e. 京都ノートルダム女子大学国際言語文化学部（*Faculty of Language and Culture, Kyoto Notre Dame University*）
f. 大正大学仏教学部（*Department of Buddhist Studies, Faculty of Buddhist Studies, Taisho University*）
g. 慶応大学経済学部（*Faculty of Economics, Keio University*）
h. 武庫川女子大学文学部（*School of Letters, Mukogawa Women's University*）
i. 福島県立医科大学医学部（*School of Medicine, Fukusima Medical University*）

Abstract（英語）

The aim of this symposium is to discuss the experience of young victims who evacuated from the Fukushima nuclear accident at the age of elementary school, and how they created their own perspective about it these ten years. This program is conducted by the collaboration between young victims and Waseda university students of the same age.

Mr. Matsuki Kamoshita has been claiming the various problems around nuclear power technology. He claims that nuclear power fundamentally holds life-threatening risk and that it is also highly questionable as an efficient energy supplier. After this symposium, he pointed out two main significance of this project. The reality of the Fukushima victims' experiences and opinions had been acknowledged by various audiences of diverse backgrounds. And, the painful experiences that victims could not talk about by themselves were conveyed to participants through Waseda university students as they spoke for them. Ms. Yurika Abe has experienced repeated evacuation. Although she had an inner conflict about what she should talk about before attending this symposium, she reflected on what she could do now through the dialogue with other panelists. Ms. Yumi Kato was separated from her own relatives and close friends during the evacuation process. She is emotionally encouraged by encountering the younger generation in the same evacuation status. Ms. Hana Unuma has experienced discrimination and bullying as a result of forced evacuation. She said "never repeat the same tragedy". She insisted on the needs of personalized official psycho-social care after disasters. Mr. Yuri Tomitsuka pointed out that this exchange greatly contributed to keeping the "memories of Tohoku earthquake and Fukushima disaster" and stated that we need to record, remember, and inherit the "narratives" of the people concerned.

This symposium can contribute to the future resolution of social inequality and division. The dialogues created by young students will break through this complicated modern world which holds massive disasters and wars.

１．はじめに

2011年３月11日に発生した東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所の事故から10年が経つ。地震・津波被災者にとっては、大規模堤防建設や市町村の高台移転が完了し、復興に向けた大きな飛躍を目指す時期に入ってきた。しかし、原発事故により避難生活を余儀なくされた人々の多くは、いまだに生活基盤が確立しておらず、生活や人生における苦悩が継続しているといわざるをえない。

早稲田大学人間科学学術院では、2011年に『震災と人間科学ネットワーク』が組織され、次いで2014年には早稲田大学総合研究機構内に『早稲田大学震災復興医療人類学研究所（WIMA）』が設立された。そして、民間支援団体である『震災支援ネットワーク埼玉（SSN）』や『東京災害支援ネット（とすねっと）』とも協働しながら、被災・避難者への支援および調査、社会への発信等が継続して行われてきた。本論文は、そうした経緯の中で開催されたシンポジウム『"復興の人間科学2021"福島原発事故10年の経験から学ぶ―当時小学生だった若者達との対話から―』（主催：早稲田大学人間総合研究センター、共催：震災支援ネットワーク埼玉（SSN）・早稲田大学災害復興医療人類学研究所（WIMA）・科研費基盤研究（B）：原発事故被災者の移住・帰還・避難継続における新たな居住福祉に関する人間科学的研究、2021.11.28早稲田大学）について報告するものである。

２．本シンポジウム企画の動機と経緯

マグニチュード9.0という地震に津波が加わり、さらに原発事故という惨事が追い打ちをかけた東日本大震災は、

2011年当初から未曾有の複合災害であるという見方をされていた。また、原発事故による避難者の苦難や生活困難は、単なる自然災害の影響ではない、私たちの社会自体が孕む諸課題を改めて浮き彫りにしたようにも感じられる。そして、10年が経った現在でもなお十分に検討されていない問題も数多く残されている。そのひとつが「子ども」の問題である。

筆者らによる「かささぎプロジェクト」では、震災後に父親を福島に残して母子で関東に避難してきた家族が直面する課題に寄り添いつつ、当該家族とともに解決していくことを試みてきた（平田ら、2012；平田ら、2015；根ヶ山ら、2015）。筆者らが出会った家族では、ある母親が「１学期は子どもがたぶん自分の何かでいっぱいいっぱいで……」と語るように、子どものストレス表出がみられ、親はそれについて心配しながらも、親自身も避難生活に伴うさまざまな対応に追われるなど、精神的に余裕のない日々が続いていた。一方で、子どもの健気さやたくましさが垣間見えるようなエピソードもあり、小学生の子どもが避難当初から、親の複雑な心境を暗に汲んだり、避難者であるという自らの立場を理解したうえで、周囲の人間関係や状況をモニターしながらふるまいを調整したりする様子を実際に観察することができた。とはいえ、親への聞き取りや子どもの観察からうかがえたことについて、当の子ども自身がどのように感じていたのか、当時は十分に掘り下げることができたわけではない。子どもが感じていることを無理に言語化させることは、避難家族がそれぞれの状況を生き抜いていくために、暗黙裡に守ろうとしている家族内のバランスのようなものを崩してしまう恐れがあったからである。

そこで、震災・原発事故から10年が経過した現在だからこそ、大学生となった彼らが語ることのできることに耳を傾けたいと考えた。原発事故による避難生活を小学生の時期に経験した被災者が、この10年間をどのように生き抜き、どのようなことを感じ、どのように思考を重ねてきたのかについて、家族の問題も含めて幅広く検討していくことがシンポジウムの第一の趣旨である。そして、今回登壇してくださる当事者学生が率直に、なおかつ安心して自らの体験や想いを語り、シンポジウム参加者らとの対話を通して互いに学びを深めていけるよう、準備から当日まで次のような工夫を行った。

①当事者学生と同年代である早稲田大学学生を主なインタビュアーとするインタビューを事前に行い、シンポジウム当日は早稲田大学学生による「インタビューを通して学んだこと」をプログラムに盛り込む
②当日のコメンテーターおよび講演者を務める研究者・支援者には、当事者学生のインタビューに事前に目を通していただく
③シンポジウム当日は、会場およびZoomの参加者の実名・所属を明記させたうえで、フロアからの質問はGoogleフォーム（実名回答）で集約し、大会実行委員を経由してフィードバックする

３．当事者学生の紹介

福島県いわき市出身の鴨下全生さんは、８歳で東京に避難した区域外避難者である。小学校時代は過酷ないじめを受け、中高生時代は境遇を伏せることで、孤独と心の痛みに苦しんだ。死にたいと思うほどの苦悩から、ローマ教皇に手紙を送り、2019年３月にバチカンで謁見する機会を得た。さらに同年、教皇来日の際に被災者代表として登壇し、改めて原発の理不尽さや危険性を訴えた。大学生になった全生さんは、『今の社会の理不尽をなくそう』、『当たり前のことができる社会にしよう』と、様々な活動に取り組んでいる。

福島県福島市出身の阿部ゆりかさんは、幼少期は自然豊かな山野で育ち、「野生児」だったと言う。原子力発電所爆発直後から放射能汚染から身を守るために、山形、北海道、福島県喜多方、沖縄と避難先を転々とする。父は仕事のため福島に残り、避難区域外の避難者を受け入れていた京都へ母子避難し、高校時代まで過ごす。小学校では「福島県民、早よ帰れ」などと嫌がらせを受けたが、避難先の地域に受け入れられるために関西弁を必死で勉強した。原発事故被害について公の場で発言してきたが、ネットでの誹謗中傷に遭い人間不信に陥り、中高時代は「病み期」を過ごした。「嘘とごまかし」が横行し、経済を優先し人命が尊重されない社会の在り方に対する憤りを再確認し、大学入学後は各地で講演活動を始める。現在は福島の子供たちの保養プロジェクトに関わっており、福島に帰るのであれば、今のところは老後かなと考えている。

福島県福島市出身の加藤裕美さんは、幼少期をドイツで過ごし、原発事故数年前から母親の地元である福島市で暮らしていた。放射能汚染から身を守るために、母子で関西地方に避難した。「みんなで避難するのではなく、避難する人と残る人に分かれてしまう原発避難」に疑問と理不尽さ、孤独感の中、「同じ痛みを分かち合える同年代の避難仲間との出会い」により孤独感から解放されたという。高校、大学、二度に渡り体験した日韓国際交流を機に、広い視野を持つこと、経験を発信していくことの大切さを実感し、「自分と同じようなこどもの被害を、二度と作ってはならない」という思いで伝えてきた。現在大学では日本文化を学ぶとともに、再生可能エネルギーやサスティナブルなモノやコトに興味を持ち、特に生まれ故郷であるドイツの取り組みに関心を寄せている。

福島県双葉町出身の鵜沼はなさんの埼玉県における避難生活は、さいたまスーパーアリーナ、旧騎西高校避難所から始まった。福島県からの多くの避難児童が通学する小学校であったが、ひどい持続的ないじめに遭う。教員に訴えたものの、手を差し伸べてくれることもなく、小学校高学年から中学校時代まで不登校状態に陥った。今でも恩師と仰ぐ中学校３年生の時に出会った担任の先生に、ようやくこれまでのいじめについて打ち明けることが出来、担任の積極的なサポートのおかげで高校進学を果たした。高校時代に仏教思想に出会い、「自分がより良く生きていくためにはどうしたらいいか、自分が苦しみを感じたときにどういうふうに解釈して、どう解放してあげればよいか」など、自身を理解する助けとなる可能性を見出し、現在は大学仏教学科にて学んでいる。

富塚悠吏さんは、福島県郡山市で震災に遭い、母方の祖父母が住む神奈川県に避難した。神奈川県の小学校では、いじめを受けることもなく、うまく学校生活に馴染むことが出来た。仕事のために福島県に残った父親とは、かささぎプロジェクト（早稲田大学根ケ山研究室）の支援を受けて、テレビ電話での通話を定期的に行うなどの積極的なコミュニケーションを続けた。母親が立ち上げた避難者の会の活動に触発され、小学生の頃からパソコンを使って、震災や原発事故被害についての発信を始めた。自身が中学高校時代にお世話になっていた、故郷を離れて生活する東北・熊本の子供たちに対する学習支援の活動「とどろき・よこはま学習室」にて、現在はボランティアの教師を続けている。原発事故を経験した一大学生として、今後の社会の在り方の議論について積み重ねていきたいと考えている。

４．被災当事者学生の経験から学ぶ

４－１　「福島から東京へ；19歳が問う原発事故」鴨下 全生

シンポジウムで登壇してから一週間が経過した。YouTube上にUPされた動画は600回視聴に迫り、この手の市民運動の動画としては視聴数が伸びている。そんな今、改めてシンポジウムを振り返ると、２点の気付きと共に、不足していた点や、今からでも急いでフォローが必要だと感じる点がみつかった。そこで本レポートでは、これらの計４点について報告することにする。

まず１点目の気付きは、客層の違いについてである。私の発表には、冒頭に、会場の参加者の挙手によるアンケートがある。原発事故による、現在の土壌汚染を問う問題と、昨年の国内全発電中の原発の割合を問う問題である。その結果が、予想外だったのだ。通常、原発事故被害を主題にした集会やシンポジウムでは、この２つの問いに対して、過半数の人は正答[1)]する（図１）。集会の参加者には、当事者や、支援に関わる人が多く、日ごろからこれらの問題点が共有されているためである。しかし、本シンポジウムの会場では、見事に回答がばらけた。特に、学生風の若者だけでなく、スーツを着た中高年の学者風の方たちにも誤答が目立った。このことから、今回の集会に

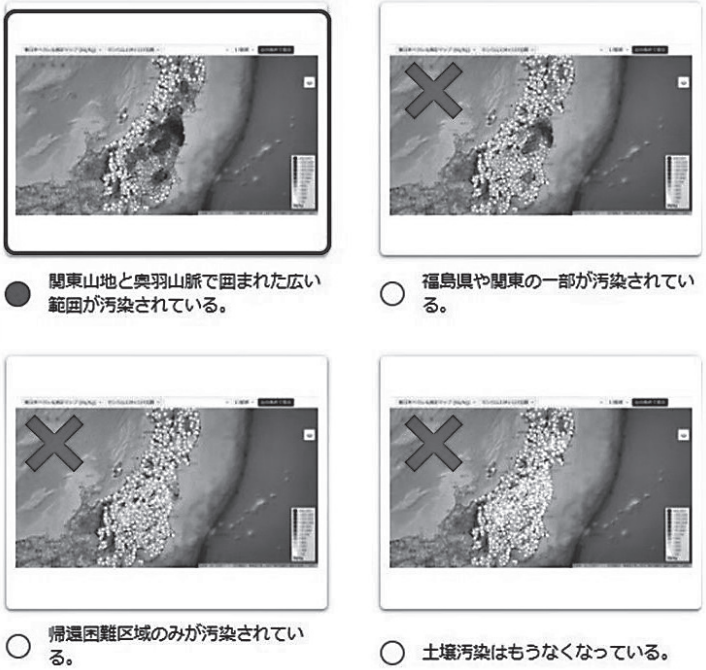

図１：2021年現在の土壌汚染の状況

は、日ごろ私達当事者が関わりを持てない人たちが、多く参加していることが判った。そして、このシンポジウムが、内輪ウケではなく、新たな議論を拓く可能性を秘めた、とても価値ある場であった、ということに気付いたのである。

２点目の気付きは、「言葉にできない想い」の発信力の強さである。これまでの私は、とにかく言葉にしなければ発言の機会を得られないと考え、話せないような辛い体験は後ろに置いてきた。個人的な体験は極力語らず、被害の実態を、事実に基づいて真っすぐに伝えることを心掛けてきた。しかし今回のシンポジウムでは、「話せない当事者」が大きな役割を担った。私自身、本当に辛かった体験は、未だに手足が震えて語れない。しかし、早稲田大学の学生や先生方による、真摯で肯定的なヒアリングが、それを助けた。他の登壇者も、辛くて語れない体験を、大学生が代弁するという形で登壇した。結果それらは、衝撃的な発信となり、会場や動画を見た人たちに、より強いインパクトを与えた。既にいくつかの感想が、私にも寄せられているが、今回語られた「語れないほど辛い体験」の代弁は、とても重要な役割を果たしたと感じている。

図２：文部科学省による放射線副読本表紙（2018）

一方、不足していたと感じた点は、いじめ問題の議論で、放射線副読本問題に触れなかった点である。避難者いじめの議論が盛り上がったにも関わらず、文科省が「避難者いじめ対策」と銘打って配布した「放射線副読本[2)]」（図２）のことに触れなかったのは、失敗だったと反省している。私はこの副読本が、一層避難者いじめを助長したと感じており、その点については文科省とも直接交渉を重ねている。この冊子の問題点については、字数の都合で割愛するが、国が避難者いじめ問題を都合よく利用し、一層分断を深めたことについて、ディスカッションの場でこそ語るべきであったと反省している。

最後に、今からでも急いでフォローすべきであると感じている点は、登壇者に対するメンタルケアである。今回、５人の登壇者と、それに付き添った家族は、通常のシンポジウムの登壇とは比較にならない程、気持ちが「ざわついた」のではなかろうか。私自身、過去のことを人前で語られることには強い抵抗があり、登壇から一週間が経過した今でも、なかなか心のざわつきが鎮まらない。もしも今、登壇者の誰かがネットの情報を見て、その中でひとつでも心無い書き込みを見つけてしまったとしたら、その傷は相当深くなるだろう。私はいじめ体験によって、今でも自己肯定感がとても低い。それでも、登壇する度に、会場からかけてもらえる温かい声に勇気づけられ、少しだけ自分を肯定できるようになる。その繰り返しで今がある。そのような、周囲からの「肯定」こそが、生きることにつながる。そもそも原発事故被害者は、あまりにも長く、存在を否定され続けたのだ。何の落ち度もないはずなのに、加害側の身勝手な主張によって、被害そのものを否定され、社会から存在を否定される苦しみ。それが10年経った今も続いているせいで、多くの人が疲弊し、自己を肯定できなくなっている。そのことを、是非、今回のシンポジウムに関わった皆で共有して欲しい。そして、今回のシンポジウムが如何に素晴らしいものであったかを、登壇者とその家族に伝え、私達の存在を強く肯定して欲しい。

1) 正答：（問１）2021年現在の福島原発事故による土壌汚染は、未だに関東山地と奥羽山脈で囲まれた広い範囲に広がっている。（問２）2020年の国内全発電中の原発の割合は、5％未満である。
2) 中学生・高校生のための　放射線副読本　～放射線について考えよう～　(2018)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/attach/__icsFiles/file/20200306_mxt_kouhou02_02.pdf

４－２　「原発事故後の状況と心境；事故前と事故後の変化」阿部 ゆりか

シンポジウムでは、原発事故後の周囲の大人の雰囲気や、徐々に原発事故が無かったことにされていく世の中で、自分が何を思いどのように過ごしてきたか、当時の状況から性格の変化、そして現在に至るまでの話をさせていただいた。

私は原発事故当時９歳で、山形、北海道、喜多方、沖縄、京都と避難した。母子避難生活の中で、原発避難者に対する差別や偏見、無理解の中で避難生活を継続し、社交的な性格から避難後は人との交流を避けるように変化した。地元の福島と避難先である京都の間でのアイデンティティの揺らぎや、孤独感、疎外感、喪失感など様々な感情や矛盾、葛藤の中でこれまでの10年を過ごしてきた。そんな中でも、原発事故が無かったことにされていく世の中の雰囲気に危機感を感じ、発言の場をいただける時には原発事故を経験した者として継続的に発信をしてきた。発信を続けていくことでネット上の誹謗中傷にあったり、周囲の反応から自分の意図が伝わらない場合があることに対し、伝え方の難しさを痛感した。また、様々な立場の人がいる中で、分断を生まぬように、自分の意図を伝えるためにはどうしたらいいのだろうかと徐々に葛藤や迷いを持つようになってきている。今の自分に何ができるのか、模索しながら自分にできることを少しずつ行いながら、現在までの歩んできたことをシンポジウムの場でお話しした。

シンポジウムに参加し、様々な立場のたくさんの方々のお話を聞かせていただいた。普段、友人に原発事故の話をすることはない。また、原発事故に直面した同年代同士であっても、原発事故の避難経験を話したりすることはほとんどなかった。だからこそ、あの場で4人の方々のお話を聞かせていただけたことは、本当に貴重なことのように感じられた。それぞれが原発事故をどのように受け止め、感じ、生き抜いてきたのか。それぞれの苦悩や辛さは計り知れないものである。その苦悩や辛さを受け止め、確実に理解することはとても難しいことなのかもしれないが、わかりたいと思いながら話を聞かせていただいた。そして、それぞれの経験を聞き取りしてきた学生の方々の存在の重要さを実感した。経験した者が語れないこと、語りにくいと感じていることは、壇上で語られることはない。しかし、学生の方々がその声を代弁することによって、届かなかったはずの声を届けていただけるということはとても大切な事であることを気づかされたのである。

パネルディスカッションでも、重要なキーワードがいくつも生まれた。「真実の開示」、「無かったことにしない」、「国際社会における原発事故の認識」や「差別しない」こと、「できることができる社会を作っていく」といったキーワードは現代社会の大きな課題であり問題である一方で、今後の希望とも受け取れるものであったといえるだろう。このシンポジウムでのお話はどれも、現代の日本社会、国際社会のあらゆる問題をも照らし出し、自分自身がどうしていくべきかを問いかけられた。また、より原発事故やほかの様々な問題についても、「自分事（じぶんごと）」として向き合っていかなければならないことを再確認した。

そのほかにも、様々な立場から先生方のお話を聞かせていただいて、自分には気づけなかった問題点や、見落としがちな観点に気づかされた。改めて、多様な角度からこの問題を捉え、考えなくてはならない事を実感した。

このシンポジウムに参加させていただいて、今の自分にできることをやっていこうと改めて決意させていただいた。私自身、これまでの自分や今の自分と向き合う機会をいただき、振り返ることで原点に返ることができ、改めて原発事故やあらゆる社会問題について見つめなおしていかなければならないことに気づいた。そして、今回のシンポジウムで新たなつながりを得ることができ、連帯することの重要性を再確認する機会にもなった。シンポジウムを通して、今の社会に対する大きな問題に切り込み、皆で考え、紡ぎだされた言葉はとても大きいだろう。突き付けられた課題はとても大きく自分だけではどうすることもできないと無力感にさいなまれることもある。しかし、シンポジウムの場でのお話や出会いから、同じ方向を向いている同士の存在を感じることで、これからの世代へと進みゆく社会への光を見出していけるような気がした。だからこそ、今の自分にできることは何か。模索し、周囲に助けていただきながら、自分ができることを着実にやっていきたいと改めて決意することができた。

４－３　「福島原発事故10年の経験から」加藤 裕美

私は福島第一原発事故後の４月末、母に連れられ、罹災証明なしでも避難できる大阪へ区域外避難をした。その１か月後、個人情報保護法により避難仲間が探せないことから、福島からの避難者が多い京都への再避難をした。

子ども心に辛かったことの一つは、避難する人としない人がいたことだ。そこから避難しなければならないほどの汚染があるならば、全員そこから避難すべきである。しかし、実際は避難する人としない人に分かれたのだ。私は母に連れられ避難したが、私の祖父や叔父家族や親友たちは福島から避難することはなかった。なぜ自分たちだけ避難するのか。祖父や叔父や親友たちをおいて避難するのは子ども心にも心が痛く、なにより親友と別れるのはとても辛かった。

そして二つ目は、「ごまかし」である。原発事故当時、避難者のお子さんが避難先でいじめに遭うというニュースが流れた。未曾有の事故により、必要最低限の荷物を携え、命からがら避難をしたにもかかわらず、避難先でいじめに遭い、泣く泣く汚染地へ戻ったという話を聞いた。それで私の母は、私が避難先でいじめに遭わないよう、転校先の校長や担任と協議し、「震災で東北からきた」ということで紹介してもらうことになった。

登校初日、担任は「震災で東北からきたユミさんです」と紹介してくれた。すると複数の児童から「東北のどこからきたん？」と質問が投げかけられたのだ。私は予想外の展開に戸惑った。「東北の南の方の、、、」私が返事に窮していると、担任が「まあ、東北の南の方や」とお茶を濁した。そんな事前対策の効果もあってか、幸い、避難者という理由でいじめに遭うことはなかった。しかし、私は不満だった。なぜ私は本当のことを言えないのか、なぜお茶を濁さなければならないのか、私はその理不尽さに悶々としていた。

避難先の小学校にも慣れ始めたある日、母は私に言った。「京都に引っ越すから」と。「なんで？」と私が尋ねると「ここでは避難仲間も支援者もおらず親子共倒れになりかねないから」とのことだった。せっかく慣れ始めた矢先にさらなる転校は衝撃だった。しかし私が何を言おうとも母の決心は揺らぐことはないと感じ、転校先のクラスメイトに別れを告げた。

京都の小学校には避難仲間がたくさんいた。心が病みそうになっていた母は、仲間の存在により笑顔を取り戻し、私もまた避難元も年齢も同じという女子児童と友人になったことでようやく心を落ち着けて学校に通うことができた。

私は福島の原発事故により、親友や福島の家族とのふれあいをはじめ多くのモノを失った。その穴はとても大きかった。その穴を埋めるため、がむしゃらに楽しいことを探し、行動した。その一つは音楽である。福島ではなかなか叶わなかったことの一つは、ライブ会場に出向くことであった。それが避難先の京都では容易にできるようになった。好きなアーティストの音楽に生で触れることで、辛い現実をしばし忘れ、心が癒されたものだった。また、各年代においての修学旅行では、社会問題や平和について考えるきっかけもいただいた。

中でも一番大きな出来事は、韓国人との国際交流が実現したことだ。韓国へは、高校時代に１回、大学生になって３回ほど訪れた。高校時代は日韓高校生国際交流に参加し、大学生になってからは日韓青少年交流キャンプで韓国の高校生や大学生と交流をさせていただいた。この時は、「核のない世界を」というサブテーマがあったこともあり、日本国内ですらなかなか原発避難を理解してもらえない中、韓国の若者が私たちの話に耳を傾け、理解をしてくれることがとても嬉しく、言葉を超えたつながりの喜びを感じたものだった。

今回、シンポジウムに登壇させていただき、普段、若者が複数で登壇する機会はなかなかないため、一般の方々はもとより、自分たちにとってもとても貴重な場だと感じた。そしてそれぞれが様々な困難に遭遇し、もがき苦しんでいたことを知った。苦しかったのは自分だけではないこと、そして、同年代の仲間に出会うことで刺激と勇気とパワーをもらった気がする。

今後の展望としては、大量生産大量消費の社会から資源やモノを大事にする社会の実現のために自分にできることをしていきたい。具体的には、環境や健康によいモノを学び、それらを広く知ってもらう活動をしたいと思う。

４－４　「避難民差別によるいじめ経験から考えたこと」鵜沼 はな

2011年３月11日14時46分。東日本大震災が発生した当時、私は福島県双葉郡双葉町に住む小学４年生であった。「地震大国」と呼ばれる日本で生まれ育ち、地震に遭うことはたびたびあったが、立っていられないほど、座っていられないほどの大きな揺れを感じたのは生まれて初めてであった。体育座りの体勢ですら揺れに耐えきれず、膝を強く打ったあの衝撃は忘れられない。その後、福島第一原発が爆発した。インターネット回線とライフラインの断絶によ

り、情報も状況も全く掴めないなか、着の身着のまま避難をし、私たちはたった一夜にして、“避難民”となった。

それから私は“地獄”を垣間見てしまった。避難先では“避難民”、“双葉町民”であることが差別対象となり、いじめを約３年間受け続けた。学校へ行けば「死ね」と人に囲まれて言われ、登校拒否をし始め、久々に学校に行けば「まだ死んでなかったの？」と声をかけられた。ものを隠されたり、「死ね」と大量に書かれた紙を机の中に投げ入れられた。児童相談室へと別室登校となった時にも、相談室まで来て名前を呼ばれ、相談室のドアを殴るように強く叩かれた。暴言を吐かれることも多く、教師が注意しても止むことは一度もなかった。“地獄”としか例えようのない日々だった。私をいじめていたのは男の子のグループだったのだ。

それから私は男性に名前を呼ばれたり、若い男性が騒ぎ立てていたり、男性が暴言を吐く姿を見ることが苦手になってしまった。ドアを強く叩く音も苦手だ。大学生になった今でも、若い男性が苦手なので大学に通うことすら容易ではない。一種の男性恐怖症・男性嫌悪に陥ってしまい、いじめから解放されて10年近くたった現在でも適応障害とPTPDにより心療内科で治療を続けている。その後も“避難民”であることを話すと恋人に『じゃあ、元気な赤ちゃん産めないね』と冗談混じりのように言われたり、友人から『お金（賠償金）余ってるんでしょ？』と耳打ちされたことがあった。現在はこの人々とは関係を持ってはいないが、未だに発言が忘れられず、靴裏に張り付いたガムのように私の心にしつこくこびりつき、細かく細かく私の心をチクチクと刺してくる。

それほど、“避難民”というものに貼られた負のレッテルは多かった。インターネットでも「避難民が〜」とまるで“避難民”それ自体が差別用語のように扱われ、私の母もそれを見て心を傷つけてしまったことがあった。こうしたインターネット上での避難民差別や誹謗中傷に関しては、これに限らず匿名性に依った暴力的行為を規制する必要があると私は考えている。また、避難民であることを差別しないことや、『避難民が“避難民”という種族ではなく“人”として皆と同じく生きている』という事実と意識を広めなければならない。賠償金に関しても、『私たち避難民には理不尽に奪われたものがあり、それを金銭に換算されただけのことであって決してプラスになったものではない』という事実も広めなければならない。

私は今回のシンポジウム内のパネルディスカッションで『大人にして欲しかったこと』を「インターネットの法規制や謂れのない事実に対して傷ついてしまった人のケア」と答えたが、補足としては、大人が大人のためばかりに動いて私たちのような子供達はただそれに従うしかなかった現実を、黙ってみていることしかできなかった現実を改めて思い出し、考え、子供に関心を向け手を差し伸べて欲しかった。未だに私は「誰かに助けて欲しい」と愛や誰かの温もりを枯渇するかのような気持ちに襲われて涙が止まらなくなってしまうことがある。それはきっと、あの時の私がずっと寂しがって怖がって泣き止んでくれないからだと考えている。

今からでも遅くはないと思うので、「もう10年経ったから」ではなく「10年も経ってしまった」と考え、そういった人々のケアを徹底するべきである。広範囲にわたる地震で被害者数が多すぎるという問題点もあるが、一人ひとりと向き合い一人ひとりがいつかどこかでホッと胸を撫で下ろせるような瞬間が訪れるようにしなければならない。10年経っても何年経ってもトラウマは他者の差し伸べる手をなくして“治る”ことはないと私は考えている。だからこそ、手を差し伸べて手を取り合い向き合いケアをしあう機関がもっと広くもっと多く存在するべきだ。私はそういった存在になるために主に児童心理学の資格の取得を目指し、また私と同じ様にいじめを受け苦しんでいる子供を１人でも多く“他人”の立場であっても救えるように高校・中学教諭を目指している。

４－５　「原発事故10年の経験；いま考えること」富塚 悠吏

３月11日の地震当日は、在籍していた福島県郡山市小学校で被災した。福島第一原発事故後、両親の話し合いを経て、母方の実家のある神奈川県川崎市への避難が決まった。しかし、ガソリンを手に入れることができず、避難は難航した。父は仕事の関係で郡山市に残ることになった。避難後は１ヶ月ほど祖母の家に滞在し、ゴールデンウィーク明けに神奈川県横浜市の借り上げ住宅に転居し、同時に横浜市内の小学校に入学した。震災前から郡山でも仲がよかった２家族も同時期に同じ地域に避難してきていたために、その家族との交流を避難先でも続けることができた。父と離れて暮らすことに対する寂しさはありつつも、比較的「切れ目のない、震災前と変化の少ない生活」を送ることができた。特に、小学校における人間関係は、先生が転校当日に、自分に震災の経験を語る時間を与えてくれ、同

級生への理解を促してくれたことで、非常に良いものを築くことができた。避難後は、同時期に避難した友人家族の母親たちが中心となって、「福島避難母子の会」が設立された。避難生活での不安や悩みの共有を目的とし、交流会の開催やブログにおける情報発信を主な活動内容とした。当時小学生だった私も、いち避難者としてブログでの情報発信などの支援活動に積極的に関わった。

現在、私がボランティアで子どもたちの学習支援をしている「よこはま学習室」は、2011年４月に、当時避難所となっていたとどろきアリーナにて「とどろき学習室」として設立されたボランティア団体である。当団体は大学生が中心となり活動を進めている。避難先で生活する子供への学習機会・空間の提供を目的とし、学校の課題や受験勉強のサポートなどを主な活動内容としている。コロナ禍においても、Zoomを用いたオンライン形式と対面形式を併用しながら活動を続けている。当初は、避難生活のために学習機会が奪われてしまった子供たちへの学習支援という形で始まったが、現在ではこの活動が、避難している子供と大学生の交流の「空間」の形成に役立っていると考えられる。震災から10年たった今日では、避難している子供が集まり、大学生と触れ合うという場はたくさん存在しているわけではない。この交流は、彼ら自身が「震災への記憶」を忘れずに記憶し続けることへ大きく寄与していると考えられる。

東日本大震災には県内・県外避難者の精神的孤立などを中心とした「現在進行形で直面している問題」が多く残っている。それらの問題に対しては片時も忘れることなく我々は考え、そして動いていかねばならない。またその一方で、この10年で顕在化した様々な社会上の問題、さらにそれに対して我々がどのように行動し、対処できたのか、あるいはできなかったのかを記録・記憶して、この震災を「これからを生き抜く知恵」にせねばならない。さらに「これから」を生きる次の世代にもその知恵を伝承し、この震災を通して経験した「失敗・苦難」を繰り返さないようにする必要がある。

今回、自分以外のシンポジストの方々のお話を聞いて、自分がいかに他者の経験や心のうちに迫ることができていないかを改めて認識することができた。自分以外のシンポジストの方々のお話の中には、本当に胸が痛くなるようなお話が多くあった。これまでは、自分もひとりの「避難者」として、避難を経験していない他の人よりは、避難者である彼らの心に寄り添うことができているのではないかと思う部分も少しはあったが、まだまだ自分には掴めていない部分ばかりであると気付かされて、他者に迫る難しさをひしひしと感じさせられた。しかし違う見方をすると、今回のシンポジウムで様々な経験や心のうちを伺ったことで、わずかかもしれないが原発事故の被害を直に受けた彼らに迫ることができたとも言えるかもしれない。他者に完全に寄り添うことは全くもって不可能であることは明白であるが、その可能性を諦めてしまうのではなく、どうにか他者に迫ろうと挑戦することに意義があるのではないかと思う。そしてこれは、「実際の支援の場」や「これからの東日本大震災に対するアクション」にも大きく関わってくると思われる。

支援の場においては、福島避難母子の会のような「同じ境遇」を経験した人たちが集まるようなものとは異なり、当事者ではない者が介入することが多いと考えられる。そこで支援する側は支援される側を一括りにして扱うのではなく、支援される側も個々の人間であり、全員が異なる他者だとの認識のもとで、一人ひとりの声に耳を傾け、彼らに迫る必要がある。それによって、支援はより良いものになっていくと思う。また今回のシンポジウムで述べられたような「当事者の語り」に耳を傾け、彼らに迫り、そして記録・記憶・伝承していくことが我々に求められる行動なのではないかと思う。我々は容易に他者に迫ることはできないという認識の上に立つからこそ、謙虚に語りに耳を傾けることができる思う。そしてこれらの記録・記憶・伝承は、震災からの10年の中で様々な人が様々に経験した「悲しみ・苦難」を、これから誰も経験しなくて済むようにするために必要な行動であると私は考える。

５．早稲田大学学生達の応答

「２．本シンポジウム企画の動機と経緯」で記載したとおり、今回のシンポジウムに向けて、当事者学生と同年代である早稲田大学学生が事前にインタビューを行った。その対話を通して彼らが受け取ったことは、「他人事ではなく、自分ごととして考える」という一言に集約されるだろう。

それはまず、これまで「どこか遠いところの誰か」に起こったこととして捉えられていた避難者のリアルな人生体

験を、当事者学生本人との直接の対話を通して聞き取ったという意味合いにおいてである（「本を読むだけでは知ることのできない、原発事故避難者の現実を知った」「避難当時の心境やその後の生活、現在に至るまでの心境の変化など、語りを通して様々な感情を覚えた」）。さらに、メディアの報道だけでは窺い知ることのできない、十分に検討されていない課題が現実に存在していることに改めて気づく学生もいた。

そしてもうひとつ、当事者学生が語った原発問題や避難者をめぐる状況、あるいは社会全体に関わる問題について、社会の一員として共有しながら自ら向き合っていこうとする意識が醸成されたという側面もある（「意見を持たなければ社会は何も変わらない」「変化に遭いながらも自分にできることを前向きに行っていくことの大切さを学んだ」）。同年代の者同士ということで互いに刺激を受けることも多かっただろうと思われる。今回のシンポジウムで重視した「対話」が、その後の行動や生き方を変えうることを予感させるような反応であり、ひとつの成果といえるだろう。

６．おわりに

５人の当事者学生の発表を聞き終えて、同じ避難者といっても、その人生体験や想いは極めて多様であるということを改めて痛感させられた。これは一般論的な意味では決してなく、東日本大震災という複合災害の特徴を端的に表すものであるといえるだろう。東日本大震災および東京電力福島第一原子力発電所の事故は、多種多様な被災者を生み出した。そして、時間の経過とともに、立場の違いや政策・制度による「分断」と「格差」を生じさせた（辻内・増田、2019）。そのことは、ある当事者学生が語ったように、自らの体験や意見を伝える際に「自分の意図を伝えるためにはどうしたらいいのだろうかと徐々に葛藤や迷いを持つようになってきている」、あるいは「他者に迫る難しさをひしひしと感じさせられる」といった心情にも結びつく。「対話」することの難しさとも直結する問題ではあるが、それでもなお、当事者学生たちを中心に、さまざまな立場の者たちが懸命に語り、聴くことを通して、互いに学び合う機会を作ることができたのは今回のシンポジウムの最大の成果といえるだろう。

さらに、震災・原発事故問題において「子ども不在」とも言うべき状況があるなかで（鈴木、2021）、2011年当時小学生だった者たちが自らの体験を振り返りながら、「子どもの視点」から捉えた震災・避難体験を語ったことにも大きな意味がある。子どもは親の心境を汲んで、自らの気持ちを一人で抱え込んでしまうことがある。年月が経って初めて語れるようになったことを、私たちはしっかりと受け止めていく必要がある。今回、当事者学生によって語られた課題や問いかけの全てに対して明るい見通しが立っているわけではない。このシンポジウムを通して芽生えた対話の芽を大事に育みながら、引き続き検討を重ねていきたい。

文献

平田修三・根ヶ山光一・石島このみ・持田隆平・白神晃子（2012）。かささぎプロジェクトによる震災避難家族の支援　人間科学研究　25（2）265-272

平田修三・石島このみ・持田隆平・白石優子・根ヶ山光一（2015）。31避難家族と子どもたちの適応－地域との関係を踏まえて　早稲田大学・震災復興研究論集委員会[編]・鎌田薫[監修]『震災後に考える―東日本大震災と向き合う92の分析と提言』早稲田大学出版部　pp.323-334

根ヶ山光一・平田修三・石島このみ・持田隆平・白石優子（2015）。30震災直後の避難に伴う家族と子どもの心理　早稲田大学・震災復興研究論集委員会[編]・鎌田薫[監修]『震災後に考える―東日本大震災と向き合う92の分析と提言』早稲田大学出版部　pp.311-322

鈴木庸裕編（2021）。福島の子どもたち―おとなは何ができたのか　かもがわ出版

辻内琢也・増田和高編（2019）。フクシマの医療人類学－原発事故・支援のフィールドワーク　遠見書房